

一者の法則シリーズ

平和統一連合 NEWS No. 63 (2013/12月号)

渡辺 久義

今、翻訳している『シンクロシティ・キー』の著者デイヴィド・ウィルコックが、最も科学的で一貫性があるとして信頼し、依拠している「一者の法則シリーズ」(The Law of One series)と言われるものがある。これはいわゆるチャネリングによって、宇宙から——進化上の先輩から——地球人に送られてくる“情報源”の一つであり、1980年代に初めて伝えられた。I am Ra と言って出てくるので「Ra 資料」とも呼ばれ、すべてダウンロードして読むことができるが、5冊の本になって、アマゾンを通じて買うこともできる。これをもし理想的に翻訳できれば、これまでの聖書や聖典は不要となり、水瓶座新時代の霊的指導書になるだろう。しかしこれは簡単に読める英語でなく、ウィルコックも、時間をかけて理解できるまでじっくり読み、その上で次頁へ進んだと言っている。『シンクロシティ・キー』にも何か所も引用されているが、そのほとんどが難解な表現で、訳すのに苦労する。

ところが今から紹介する一か所だけは、わかりやすく、しかもここは特別に読む者(少なくとも私)の心を打つ。私はここを訳しながら泣いた。恥ずかしいので顔を洗って家人には見せなかった。「一者の法則シリーズ」はすべて、質問に対して Ra が答える問答の形で進められる。因みに、ウィルコックは、Ra は創世記3章に出てくる、「回る炎と剣で命の木を守った」ケルビム(あるいはその階級の天使)ではないかと言っている。

ここで質問者は、生まれ変わり(再受肉、再生)について質問している。(これは『シンクロシティ・キー』の中心テーマの一つであり、ここは別に長い一章がこれに与えられている。)なぜ人は前世の記憶を忘れるようになっているのか、と訊ねている。

50.7 質問——なぜ人は生まれ変わって、自分がやろうと思ったことの意識的な記憶を失わねばならないのでしょうか？ それでもなぜ、[まだ霊界にいる間に]こうしようと望んだように行動するのでしょうか？

答え——・・・ポーカーのすべての持ち札が見えている人の場合を考えてみよう。この場合、彼にはゲームがすべてわかっている。このギャンブルは子供の遊びでしかない。なぜならリスクがないのだから。他の持ち札がわかっている。可能性がわかっている。そこで勝負は正確に進行するが、何の興味もない。

“時/空”[死後世界]と“真の緑色”濃度[高次元世界]においては、あらゆる人の持

ち札が公然と見えている。思考、感情、悩みなど、すべてが見える。隠すことも隠そうと思ふこともない。だから多くのことが調和して達成されるが、心/体/霊（複合体）は、この相互作用からは、ほとんど極性[成長]を得ることがない。

さてこの比喻を再吟味して、あなた方が想像できる最も長いポーカー・ゲーム——ひとつの生涯——にこれを掛けてみよう。カードは、愛、嫌悪、制約（欠点、煩悩）、不幸、快樂、等々だ。それらは配られ、配られ、また配られ、その連続である。あなたはこの受肉の期間に、あなた自身のカードを知り始めるかもしれない——この「始める」を強調しよう。あなたはあなたの内部に、愛を見出し始めるかもしれない。あなたは、あなたの快樂、制約、等々のバランス（埋め合わせ）を始めるかもしれない。しかし、あなたが他-自己（他者）のカードについて持っている唯一の指標は、眼を覗くことしかない。

あなたは、自分の持ち札も、彼らの持ち札も、多分このゲームのルールすら覚えていることはできない。このゲームに勝利することのできるのは、すべてを溶かす愛の中で、自分のカードを失ってしまう人だけである。それに勝つことのできる人は、自分の快樂を、自分の制約を、自分のすべてをテーブルに投げ出し、顔を上げ、心の中で「みなさん、すべてのプレーヤーのみなさん、あなた方の持ち札が何であれ、私はあなた方を愛します」と言う人だけである。これがゲームの勝ち方なのだ——知り、受け容れ、許し、埋め合わせ、愛の中に自己を解放すること。これは忘れることなくしては不可能である——なぜなら、忘れることによって、心/体/霊存在の完全性に、何の負荷もかからないからである。

なぜ前世を忘れるようになっているのか？ もし我々がそれを覚えていて、自分は前世ではAさんを苦しめたのだから、Aさんには特別、奉仕するようにしよう、Bさんには苦しめられたのだから、少々意地悪くしても許されるだろう、というようなことになれば、これは処世術であって、確かにうまく生きることはできるかもしれないが、肝心の愛を学ぶ機会を得ることはできない。うまくやる者でなく、自分のすべてを投げ出して愛を達成する者だけがこの人生に勝利する——つまり人間進化の資格を獲得できる。この進化の資格試験に集団として合格するまで、我々は何度でもこの世に生れてくる。しかし、もうこれ以上浪人することのできない時期がきている——そういう教えだと私は理解する。